

七x431

3

開卷
驚奇
支那風俗一斑

明治十八年四月出版

弘道書院

雜書
出版部

發兌



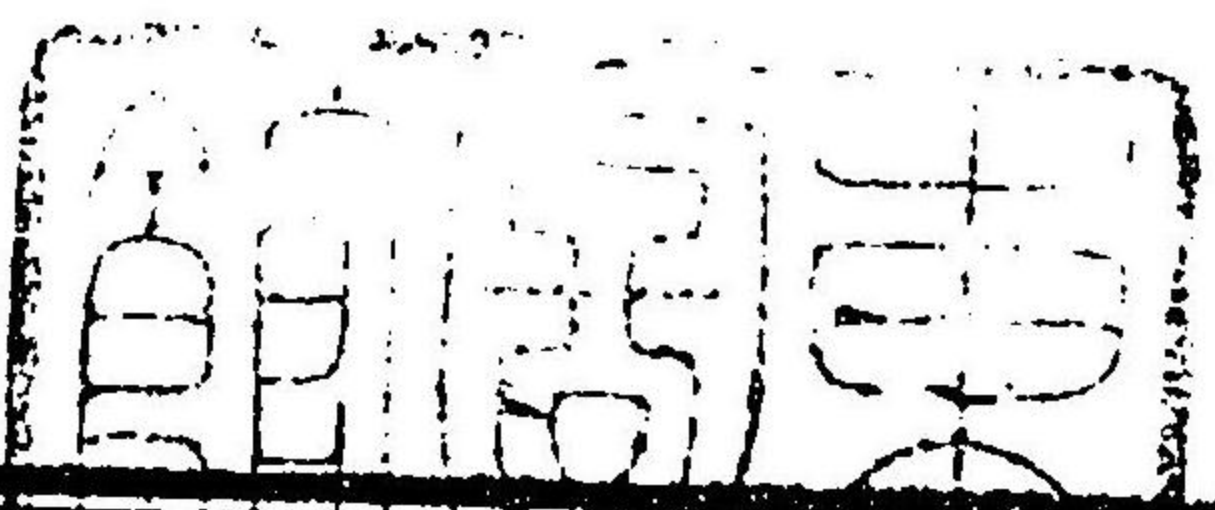
支那風俗一斑

目次

—	住居家具の部	附 烟草阿片煙草の事
—	飲食類の部	附 婦人足折の事
—	婚姻の部	附 罪人虜囚所刑の事
—	牢獄の部	附 哭者働者の事
—	葬祭の部	附 官吏選擧法の事
—	貢院の部	附 青樓割烹店の部
—	遊戯の部	附 羽子追劇場の事
—	市場の部	附 通用物の事
—	雑部	

引用書目

- タムソン氏支那國并ニ支那人風俗記
- フォルトン氏支那茶園記
- ケルマン氏亞西亞北部危難記
- ニグー氏支那國并ニ支那人風習記
- ペーリツ氏書入万国紀行
- サムマール氏支那語學書
- ヲキスンフォールド氏支那教育史
- マリチン氏支那政事商法
- プランデヂ氏北京政府
- ウィルヤム氏支那一年紀行



開卷支那風俗一斑

それ伎那は馬鹿より大きな國にして又馬鹿に人衆き處なり其大なる國なるが故に奏皇の曾て馬鹿より長き萬里の長城を築きて今に至るまで世界奇物の一とす猶飽足らずやありけり馬鹿より大きな阿房宮を造り立て、其焚けたる時、火三月も消えざりしとかや又其人衆き處なるが故に白起將軍は趙卒四十萬人を惜氣もなく坑に入れて埋め殺し周瑜は火計を以て一度に曹操が百萬の水軍を攻め亡ぼせり古事ハ姑くさし置き茲に新らしき西洋行客の著したる書に據れば支那帝國中よ於て相互ひお通せざる言語の種類は七十餘種あると云ふを以ても其國の大いなる

事を押測るべし又時辰機の一秒時毎に彼の辨髮公一人つゝ我前を通行すると仮り定め支那全國人民が悉く馳せ過ぐるまでよの凡そ何程の時間を費すべきやと言ふも少なきとも二十五年の歳月を経べしと聞く人の衆きこと實は喫驚仰天すべきに非ずや斯る國柄なるをもて其習慣風俗もまた馬鹿々々しき事甚だ多し去れど之をことごとく一書中も網羅して綴らんとすれば恐らくは百千冊の多きに至り著者が一生中の勞力をも丸て之が爲めに費さざるを得ず可嗟馬鹿々々しき事の爲め又馬鹿々々しき心勞を爲すの實に馬鹿々々しき事の限りなれば唯彼の風俗習慣の中お就てその最馬鹿々々しき者を選び記さんのみ然れども著者の自己の鼻毛の先き程も決して支那を馬鹿にして

此書を物するにあらざらず字内何レノ邦國とて豈馬鹿氣たる事のなからめや西班牙の牛闘の野蠻残酷の遺風を文明開化の今日も存し佛京巴里の賣姪女の怠惰淫逸の有様を五大洲の人に示し日耳曼の私憤私怨の爲めに果合頻り流行して英國に利己無情の風盛んなり况や革帶もて婦女の細腰を引締め天賦の身軀を損なふて意氣と稱し婀娜と呼ぶの歐米一般の通俗なるをや之を要するに邦人の耳目も珍らしき支那の風俗習慣を擧げて人々が春ながの徒然と之を讀んで臍下も茶を湧かし聊か眠氣を醒して宰予の譏りを免れしめんとする而已讀む人請ふ著者も向ふて馬鹿々々しき哉と宣ふ勿れ穴賢く

住家の部

國中高山深林多き地方に木材いと饒豊よしして之を用ゐる事隨意ていごのま且つ便利なれども平原曠野の土地より木材はなとだ乏しく偶まありとも其價非常なり例へば四川、山東、山西、諸省を始めとして其他内部の諸州は民家多くの木をもて造れり又浙江、蘇江、等江より沿ひ野を帯ぶる土地より於て瓦をもて造れる宛がら我邦の土藏の如き家あり或は物置小屋の如きものあり尤も城内より住居する者の城郭中の地界限りあるに由り幅廣き地面を所有しがたし故に二陸三陸の家も往々なきより非ず去れども上海、廣東等も在る西洋人寄留地の藪々たる支那人の住家をもて支那固有の家屋ならんと思ふ者あらば是れ大いなる誤りなり支那固有の家屋の槩ね窓狭く天井低く日光の透明と空氣の流通

どみな甚だ悪く室内暗黒して塵埃ありとも辨せべからず且つ恒に惡臭ありて慣れざるものゝ嘔吐氣を催す我邦の文人黒客杯は香を焼くことをもて頗る風流の贅澤と思ふべけれど開の全く心得違ひにて實は室内の空氣腐敗て臭鼻を撲ちて來たり如何に不潔を心よ止めざる辨的先生にても殆んど堪えがたきより香を焼て之を防ぐのみ昔秦の始皇帝が沙丘より崩御して咸陽より還る時其屍腐敗て惡臭甚しかりければ一石の鹽魚の腐れざるを車に乗せて屍臭を亂し人を瞞着たると同一手段なり又支那人の五葷の内最も好んで葷韭を食ふをもて對話の際其臭もまた耐にがたし是を以て邦人若し支那人の家屋に入れば糞臭葷臭油臭等の諸惡臭の彼の馥郁たる香氣と混合して一種得て名状

すべからざるの怪臭を成し長く坐は在りがたければ是非とも別は自から匂袋を懐中へ用意するか或は良き煙草を喫するの何れか一の防臭法を爲すこと肝要あり大家として間敷の多き處の暗室極めて多く稍烏羽玉の間に近き程なれば白晝といへども灯火を要するなり荷にも貧小他家に非ざるより一般に皆正廳、客室、寢房、大層立派なる名稱を附けて家内の男女の互ひは室を異にし兄弟姉妹と雖も往來する事の稀れなり古聖の所謂男女室を同ふせずの教を守るが爲めあるべし斯く大層らしく又行儀正しきや似もやらず室中の男室と女室とを問はず臭氣紛々塵埃靴を没する汚穢有様なりソレは引き返へ備ふる所の器具に至りては紫檀、黒檀、朱泥、碧玉其他隨分高價の品物もて造

りしものあり去れども其上面への塵埃山の如くも堆く積りて色をも見分けがたき程あれども之を掃と云ふ事なく一箇の椅子幾十圓の品もあるべく一臺の寢床數百圓の物もあるべきにあつたら貴重品の塵芥中へ泣かじむるの怠惰とや言はん不行届とや申さん昔し支那の聖人の洒掃の式を民は教はられたるが今も於て余の洒掃學科の支那人は殊に必要なるを知れり支那人が何故に自から好んで狹隘不潔城中へ住居するやと言ふは開の勿論商法上の便宜も因る事なれども猶他に重なる緣由なり即ち劫盜侵奪の難少なければ生命財産の安全を得んが爲めなり省城の四方に塹壁の固わりて且暮も諸門を閉閉も兵衛いと嚴重なれを鼠盜狗偷の患は無

八
よのあらねど劫盜侵奪の恐れは甚だ少なし抑支那の劫盜
の内治の行き届きたる文明國の劫盜の類ひもあらず黨を
結び伴を集め少なきもの數十人多きもの數百千人に
して彼の漢末に顯れたる黃巾の賊徒か又は水滸傳の物
せる梁山泊の豪賊も其勢ひあさく劣らざるもの常に
絶ゆること亦く白晝といへども公然人家を闖入りて財寶
を掠め奪ひ官憲得て之を豫防すること能はず是を以て諸
民樂ぬ城中に入りて居を營み或は賃居するを好むあり去
れども職業の模様よりて城外に住せざるを得ざる
ものあり例へば農を業とする者の如し此等の人民の郷勇
と名づくる士兵隊を組み立て鐘鼓烽燧等の相圖に應じ何
時よも招集するの備を設け常々怡も戰時の如き戒嚴をな

九
して其生業を營なむの不便あり之を引換へ城中の人民の
斯る警戒なきのみならず常に官吏の膝下にあむが爲め
偶々訴訟事件の起ることあれば傳手を求めて賄賂密託杯
して勝公事を得るに便りあり抑も支那の裁判と言ッパ他
の文明國の如く理非曲直を正し權利義務を盡さじむるよ
の非ずして縁由あつき者賄賂多き者ハ容易く勝を得て縁
由薄く賄賂少なき者ハたどひ蘇張の如き雄辯者を狀師と
するとも必らずや敗を取ること免れず支那人の套言よ
富者に非ざれば訴訟を起すこと能はずとい甚だ微妙の意
味ある事よて譬へば茲も民事の原告と被告とあらんに原
告の百圓の賄賂を爲さ被告の百五十圓の賄賂を爲せハ支
那の官吏の無論も被告を勝公事と決すべきよ由り其事を

窺ひ知りたる原告の必らず更らに百圓の賄賂を爲し併せて二百圓を以て勝公事を買はんとしてなることならん斯く互ひに賄賂をもて勝公事の競買を爲し官吏の最多数額を裁斷を落札するものから身代の善きもの常勝公事を得て身代は劣れるもの何時も敗訴となるが故なり縁由の厚薄あるに因りて依姑最負の裁判行はるゝも其理右と同ト斯る次第よりかりろめも資産ある者の我もくど城中に住居し遂に開熟不潔鼻向けも出來ざる稠密狹隘の市街を成すに至れりといへり雪隠の各國普通の如く家の一隅に在りて浴室と相接近するの怪しとするに足らざれども中の一室の内之を並べ置くものありて一方にて入浴の人あるをも構はず一

方にての平氣も大小便を放出するとの通例の事とす且つ此大小便とても我邦の如く掃除屋なる者ありて汲み取るに非ず浴餘の水と共に屋外の溝中即ち往來端へ流れ出で路傍に彷彿無数の豚の之を以て常食と爲す或る人の狂詩に「橋風吹三草臭一街雨漂糞泥」と詠せし其實を得て妙なるを覺ふ又構造の粗末なる雪隠にて脱糞中も豚兒きたりて下を窺ふをもて時々人をして喫驚せしむる事あり支那人の燈火と煙草を持ちて雪隠に往く風習あり灯火を携へるの雪隠の暗きが故なれども煙草の何のためなるべきか或る人の開の支那人固有の氣の長き故ならんと言ふ左もあるべきか併し一もの臭氣を防ぐ方便として用ゐるならん扱彼の豚の食ひ剩したる糞泥の晴天の沙塵も交りて風

裡より飛び雨天に泥濘となりて其深さ靴を没す支那人の
生れ落ちたる時より此汚穢の中より成長せし故に毫も之を
不潔とも思はず街頭に糞沙のかゝりて食物を賣り之を買
ふて食ふ者も平氣なれども海外人の其不潔を恐れ身分を
る者の馬車も非ざれば外出する事稀れなり

食物の部

食物の貧富の差あるも因りて固より同じからぬ能く豚
肉を食ふの貴賤上下の區別なし宛がら我邦もて香の物を
食する如く朝夕三度の食事と豚肉なきこといならず常食
中の重なるもの米飯なること勿論なれども家鴨、雞、牛、豚、
猫、蛙等の何時も市場に在り其好んで食ふ所なるを知
るべし此他野獸、野鳥に至りては風土氣候の同じらざる

因りて處々幾分の相違ありまた海江に沿ふ地方より
美味の魚類甚だ多し野菜の培養のいづこも宜きを得て本
邦産に勝る物おし支那人の鳥獸、米穀、野菜は論なく總て
能く煮焼して食ひ生物もて食ふこと少なし曾て日本の書
生が香港の支那人家屋に寄留したまはる日本流の鯉の刺
身を食らひし其邊の支那人の東洋鬼が生魚を食ふ予や
早く往き見よとて一街中を觸れ廻り瞬時は老少男女大勢
其家を取り圍み戸隙窓間より其様を見んとし彼の書生等
は甚だ當惑したり其後支那人の評判は東洋鬼の生魚を食
ふ必ず亦人の肉を食ふならんとて童幼婦女の痛く日本人
を畏れしと云ふ支那人は菜漬、大根漬類にて其儘に食ら
ふ事もなく必らず之を水に浸し置き塩氣の稍減たると時

豚肉又ハ牛肉と共ニ煮て食ふを常とぞ若し然らざれば豚の脂あぶらよてよく煮て食ふなり獨り豆腐とうふの生なまのま、醬油しょう油あるひハ菜油さいあぶらを濃うすぎ生姜しょうがを細末こまかニ割きりたるを和あして食ふ略本邦のヤツコ豆腐の如し但し彼の生油なまあぶらをかけたるハ邦人の槃ひらして閉ひ口くちするからん又何等の物を煮るも豚肉あるひハ豚の脂をもて味あじひを付くる事ハ本邦ニ於て鯉節りせつを用ゐるが如し

鶏肉けいごを煮るにハ丸まる煮ににして稍西洋料理せうせいりの如く外見そとみより成るべく其形状かたちを損こねざる様ようもすれども而しかもまた自みづから一種の妙處たぎあり开ひて煮ること二三日猶長きときハ四五日も及び其柔軟やわらかなる事熟煮魚肉じやくの如く箸はしを以て之をわやなせむ肉と骨とを離はし又骨と骨とを離すこと意いのまゝよて

毫ちも差支さしなま此ハ畜ちくに鶏けいのみに限からず牛うし、羊ひつたね、豚等皆志しかり縦たひ如何なる大塊肉おほいきにても勝手かてニ二本の箸はしよて食ふこと

の得らるハは支那より外萬國中に恐らくハあらざるべし楊子江やうしきやうの南北なんぼくとも鹽しほを産すること非常ひじょうニ多くして價あたいも從したがふて廉たなれば居民じん皆之を常食じょうじきとす本邦にてハ鹽しほハ精分せいぶんを増すと云いハ美味あじわい多しと云いひて人々賞翫しょうくわんすれども價あたいの高たかきが故ゆゑニなかく中人以下ちゅうじんの口くちハ入いらず然るハ彼の江南きやうなん江北きやうぺいの民たみハ茶漬ちやくの菜さいもすつぽんを食するハ幸福さいふなりと申すべしか尤もつとも支那にてハ何物を煮るも其熟じやくしたる上うへニ猶能なほく煮詰ねぢたるもの故ゆゑも形かたちも往々むさむさ變改へんかいて其物質ぶつしつハ何なるや更さらニ辨知べんちしがたきもの多し別わかて鹽しほを煮て食卓しょくたくの上うへへ陳ちんべたる處ところハ色いろと云いハ形かたちと云いハ奇々怪々ききかいの光景こうけいなれば

邦人杯が偶々此食膳に向ふ時箸を取りて首を傾け躊躇
 ことあり或る時數個の日本人が旅店に於て晚餐に臨みた
 るに薄暮まで未だ灯せざれば詳かに諦視ねども一皿の烹
 もの少しく甘かりきふなる香あり已にして衆皆之を食ひ
 ども何物なるやを解せず或の小鳥ならんと言ひ或の鶏雛
 ならんと言ふ者もありしかども衆論遂に鳥類に非ざるこ
 とを決し料理人を呼び之を問ふに語未だ熟せざるが爲め
 に聞いて分明ならず因つて其生物を持ち來らせて之を見
 たるに何ぞ圖らん此は是れ巨大なる青蝦蟇數十匹を細
 て縛りしものなげければ衆愕然として或の嘔吐せんとす
 る者あり中一箇の負嫌ひ生おる勉めて言笑ひ言ふ余
 輩已に蝦蟇を食へば必らず龍蛇を斬るの功ありと云ふ

男兒の眞面目とや申さんか鼠の皮を剥き小鳥焼の如くし
 て食ひ又の油よて煎あげて食ふもあり此鼠の北部は最多
 くして専ら田畝の中に生ず去れど家屋中へ棲む鼠も同じ
 色形なれば往々之をも交せて賣れども人其の眞偽を知る
 こと難し猫肉の支那にては極めて珍味の中に屬し價ひも
 甚だ高し廣東邊よては一死猫の價凡そ七十五錢よして貧
 書生杯の齒の容易にたゞざると宛がら我が新橋柳橋等の
 生たる猫に於ると一般なり猫肉を調理することの他の鳥
 獸と去までの相違なければども葱類を和して煮ること通例
 なり生美もまた必らず和用ふ孔爺の所謂鹽を撒きして食
 ふの遺訓を守るものやあらん牛肉の昔時の大半杯よ用
 ぬて随分貴重せし様よ覺ふれども現今の豚肉の如く多く

用ぬぬと見え響應の席へ招かれても主人より貴客の牛肉を召し上るや否やと問ひるゝとあり其調理法の西洋料理の「スツ」は類するもの多し魚類もまた熟烹たるものを食ふ邦人より之を評せば熟烹と言ひんより寧ろ烹爛たるものと言ひんのみ鶏卵及び鵝卵のごときも鹽漬よなしたるを用ふ之を食ふに能く烹て内部の堅くなるを待ち上殻を剥去り外面の白色の變じて青銅色となり内部の黄赤となりしを食膳は供ふ其臭氣紛々として鼻孔を穿ち忽ち嘔吐を催ふせども忍んで食ひば始めの一種の甘味なきにあらず去れと暫時の後又酸液を吐くこと甚だし總へて何物も限らず支那人の烹過ぎて滋味の失せたるものを食する特別の習慣なり地球廣しと雖も恐らく此くの如き國

のあらざるべし茶は寸時も左右を離し得ざる飲料として飲様の各人ひとつづゝ大なる茶碗を持ち之を茶を入れて熱湯を注ぎ蓋をその上へ覆ひ蓋と碗との間より湯を他の小なる茶碗へ移して飲む宛から日本にて振り出し薬を取扱ふが如し茶菓子の色々なれども各家よいつも貯へ居るもの乾したる西瓜の種なり之を食ふにハ口中にて嚼み上殻を去りピツツと吐き出して内部の白き處のみを食ふるの上殻を吐き飛ばすよの卓上卓外の嫌ひなく貴客の前にて少しも憚る所なし又饅頭をも好んで食ひ問食事も代へ用ふ此の饅頭の餡に豚肉、胡桃、胡麻杯を入れたるものにて甘きことも非常なるが油くさき事も亦非常なり食事の大抵朝夕二回とす中食の點心と稱へて極めて簡易

品を用ふ貴族豪家のせれ、家法あれば一般の論じかたければ中等以下の午前八時もしくは九時に朝飯を喫す其食品の数は貧富の度より多少あれども概肉類其外三四種以上として或は酒をも用ふる事あり點心は正午より一時の間ありて菓子を喫し茶を飲むあり稀薄粥を啜り一時の溲暮に至りて晚餐を食ふ其品數の朝飯より異ならず普通の商賈職工の家にては一日中火を燃すこと必らず朝夕二回止まり彼の點心の時刻より大道を賣り行く餓飢粥、菓子、茶を買ふを常とす就中茶の二六時中往來を賣り歩行き何時も買つて飲むことを得べし煙草の灯火にて喫する故に嚴寒の時にあらざれば炭火を要せず又極貧の家にては終日火を燒す路頭の食物を買ふて生を繋ぐのみ

此の我邦の貧民に比すれば聊か便利なるが如し喫飯の時も男女は必ず室を異し中等以下の家とては母子夫婦兄弟姉妹同室にて飲食するに甚だ稀れなり一口に言へば男の男どち女の女どち相集りて飲食する習ひもて宴會の申すに及ばず不斷の食事も長幼主客の序を正して食卓の周圍に居列び長より幼客より主と食を捧げ酒を薦むるの如何も聖人の國たるに耻ぢす去れども卓上より彼の油臭き食品を人數の多少に應じて皿鉢に盛て陳列て人々の各々飯椀杯と箸一箇ついと箸一對ついとを持てども別な食品を分け入るゝ器なきより四方八方より手を出して彼の大皿鉢の食品を箸にて取りて食ひ又は口に其汁を汲み取りて飲む故も動もすれば主客同時に一鉢

の汗を飲まんとて頭あたまの鉢はち合あはせを爲さんとし兄の魚頭うまのたまも箸しほを
 着くれば弟も亦魚尾うまのびに箸しほを下し双方の箸の鉢はちの中央ちゆうぶも交まじ
 加くわて時々軋こも合あはせひきの機はらみも肉を落し憐あはて、拾ひろへんとして他
 が鉢はちみし肉片を取りて食ふ杯の奇觀きかんあり殊ことも己れが此の
 中ちゆうに残る餘汁あまじゆを鉢はちに復かへ瀝しぎ或あるの箸頭しほづつも食くひ剩ませる殘肉ざんを
 皿わの中ちゆうに投返なげかへすが如ごときに至りての不潔ふけつもまた甚こだし若ごとし
 夫うれ春花はるはな秋月あきづき沈魚ちんぎよ落鴈らくぐんの美女びよめ妓童きどうと對食たいじきするならば此く
 の如くもても或あるの興きようも入る人もあるべけれど老齒らうし黄色わうじきも
 して口裡くちちゆうより惡臭あくしゆうを吐はき又は然しからざるも唇皮くちひのかわ黒色くろしきもして
 亞弗利加あふりかの黒奴くろんぼも跳足はだしで逃にげ出す様なる支那人あしやんじん阿片煙草あへんたばこ
 を喫くするもの顔かほ色土しちの如く齒はの淡黄たんわうもして唇は淡黒たんくろも
 りと對坐たいざてども一器の汗を飲のみ肉を食くひ彼れが汚

唇くちびる齒はの餘瀝あまじゆを紙かみるの如何なる支那癖あしやんじきの風流茶人ふうりゆうちやじんといへ
 ども必かならず快こころよしとの爲ためさいるべし
 煙草たばこの本邦ほんぱうの刻煙草ききやんそうに比くらべれば刻きみ方かたの稍なほあらしきもの多おほ
 く製方せいほうも少すくしく同じからねど其色は概おほね淡黄たんわうなり之これを吸す
 ふよの勿論もちろん煙管えんくわんを用ふと雖なほも煙えんの煙えんを水中すいじゆう又またの菜油さいあぶら中ちゆうも
 通過つうごうして吸すふを常つねとす是こゝの煙脂えんじを濾こ去するの仕方しかたなり煙管
 の製せいの皿わの些ちしく後のちの方かたも小ちひき水飲みづのみに「コツア」程ほどの水溜みづたまを
 造つくり其胸腹むねはらより長ながき吸口すくちゆうを附つけ水溜みづたまもは絶たえず水又みづまたの油
 を入れ置き飲のまんと欲ほする時ときの皿わも煙草たばこを入れ傍かたはらに在ある
 灯火とうかを唐紙たうしの捫と糸いとも移うつして煙草たばこに點くじて吸すふ斯ごとくすれば
 煙えんの自みづから水中すいじゆうを溜たまりて脂あぶらを脱だし口くちも來きる故ゆゑに其味そのあじ一層
 美うなり此器このうつはの外ほか出での際とき興車きようぐるまに非あらざれば携帶たせがひに不便ふべんなるよ

り専ら屋内いんうちまで用ふ雪隠せきおんへ携へ行くも此器なり又富翁かみちが長煙管ながえんくわんをもて喫烟けつてんを見るも翁おきなの椅子いすも憑りて三尺餘の煙管を口くちも含みて安坐して在り倚童時かたなごもきたりて煙烟えんえんを去り新煙を加へて火を點たくずれの翁の只半睡はんねいの中なかもスバくと喫するのみ青樓せいろうも於て遊客やくかくの喫煙するも略之りやくと同じく日本にっぽんならぬ衾みどりとでも云ふべき了め髪かみが傍そばありて煙草を詰つめ替へ且點火てんかす我邦の遊郭ゆうかくも於て彼の朱管しゆくわんの長煙管をもて授受うけわたすと孰いれれ興味きょうみの多きやの著者の知る所しよもあらず叔父おじ又阿片あへん煙草の有害ゆうがいあるは今更に言ふまでも無き事なるが支那人しやなじんに在りて阿片を喫せざれば通常の社會せうじゆうに入ること能よきこと猶本邦ほんぱうも於て牛肉を食たはざる者ものを頑固くわんこと言ふが如し阿片を飲めば必ず酔ふて眠るが故ゆゑも之を

吸ふすは先づ横臥よこがしすること肝要かんようなり去るからふ總べて客を引くの家青樓茶亭せいろうちやていの言ふも及および普通の家いへにても宴えんを設けて客を招まねく時にの室の一偶ひとも臥臺ふしだいありて阿片の喫煙けつてん所ところと爲す予が友人曾て支那しなに在りし時或る豪家ごうかに招かれ已むことを得ず之を一吸したるも其香氣きあじの煎豆いりまめの如く頭痛づうとうを起して甚だしけれを辭こりて第二吸を避さけたりと然るも支那人は之を好むこと酒食しゆじきも過すぐるのみならず常つねも人に向ふて阿片は情慾じやうよくを殺ころぐものなれば旅客りやくかく遊子ゆうしに必ず携へ持ちて旅中の憂苦うきくを慰なぐさむへき要品ようひんなりと言ふ縦たひ阿片の情慾を薄うすからしむるにもせよ又能く生命いのちを短縮たんしゆくするものとするれば其の利害りがいの如何いかも予や尤も青樓せいろうにて縁酒紅燈えんしゆこうとう一夜の春はるを買へば少なくとも二三圓の費ついですべきも阿片な

れば唯總かよ二三十錢にて一夜の魔睡を得べし故に支那人は目先きの損得を算盤上より推し出し生命の價より氣が附かれずして計算外に置くものならん或る英人の言ふ曰く若し支那と戦争を始むる事あれば我が英國は忽ち阿片の輸入を止むべし然る時の支那たどひ數百萬の兵ありとも數月を出でざるも皆羸弱で物の用に立たず遂には自から死没せん彈丸硝薬を費して之を攻むるに及ばざるなりと此は是れ聊か戯言の如しと雖も而かも決して其實なきにはあらず阿片煙草は一度之を吸ひ始めて習慣となりたる上の若し俄かに之を止むれば精神衰耗身体羸弱ひさしからずして死するに至る彼國の囚徒の顔色蒼白して形骸憔悴し肺病患者が幽霊となりて顯れ出でじが如し獄

則の苛虐なる事ありとは雖も其俄かよ阿片を絶ちしに因るもの多しと云ふ

婚姻の部

方今支那の婚姻の仕方よ於て門地血統を選ぶ事ハ貴紳豪族にのみ限り通例の采幣の多少を選ぶのみよて其他の事ハ問ふ所よあらず去れば如何よ卑賤の民種よても金銀よさへ富む時は揚豊趙瘠意に應じたる美人を娶ることを得べし譬へば婦女ハ一の賣物にして男子の斷弄物たるよ過ぎず是をもて正妻副室の別はあれども副室かへりて正妻の上よ立つわり甚しきよ至りてハ第一第二と番号を附けて正副の別を立てざるものあり而して夫の妻を遇ふことは甚だ苛酷よして束縛することハ言語よ絶はたり婦女の足

折の如きも其口實とする所の進歩搖々とか云ふて足の細
 きが爲めに歩行方の美しとするもあれども實の婦人をし
 て外出も不便として容易く他人も逢はざらしめんとどの男
 子の妬心より生ぜし事疑ひなし貧民の女にして兼て醜な
 るものゝ足を折らるゝ恐れなし女子生れて四五歳に至れ
 ば其足趾を折り細き摸形に入れて長大ならざる様にす去
 れども摸形の外も在る部分の却て甚だ長大となれば最醜
 し富家の其女子の醜なるも左まで心も留す別に大金を擲
 ちて美女を買ひ求めて養ひ置き自家の眞女子を人に嫁す
 る時此美女を昔しの所謂賤すなはち權妻として女と共に
 婿の方へ遣す簡も言へば權妻附の正妻が婿の家に至るな
 り此權妻の數として一定の法あるも非れば中又は賤二人

を添へて遣はす富家もありと聞けり總べて貴紳富家の女
 又の美人の皆足を折られて居る故に火災若しくは兵亂の
 時より逃れ得ずして非命の死をなす者多し平居室内にて
 も壁椅子机の類も手を掛け搖々として歩するを得るのみ
 稍遠き所も至らんとすれば必ず侍女の肩も倚りて掛り歩
 み屋外も出づる時必らず輿車も駕らざるを得ず是れ貧
 めして醜なる女の幸ひも足を折られざる所以なり又婦人
 の爪の長きを誇るの風あり是れ自身に賤業勞働を爲さ
 る事を人も示す爲めなるべし貴婦人或は藝娼妓の銀或は
 金を以て細長くして尖りたるものを指頭も付けて爪を護
 ひ併せて彈琴の用も供ふ閑語休憩婚姻の儀式も甚だ鄭重
 めしてくだしくしければ細目の略し新郎と新婦の家へ親

迎ふ行き先導して家と連れ還るを例とし親族朋友は家と待ち受けて燕飲數日の久しきに及ぶものから貧家とて一妻を娶れば必ず數十金を費す富家に至りては其費用の巨大なること推して知るべし去るからに支那にては妻妾の多少をもて貧富を區別し彼の五人の妻妾を有するも依り身代甚だ富めり彼の妻妾各一人あれば左までの富豪も非ずと言ふなり

葬祭の部

支那には素より多くの寺院あれども其僧侶の我邦の如く葬祭を主とする事稀れなり埋葬場の城外幽閑の處ありて諸民共同の地とす中より己れの所有する地面内は葬るものあり埋葬の法の殊の外手重くして富家の如き墳墓を

造くるに數年の工を費やし數千萬の金を惜まず葬送の時身寄りの男女の皆素衣を着て號哭とて聲を立て泣きながら又柩の後へに隨ひ又慟者哭者と云ふものを備ひ行列の中又交り柩と先だちて歩み哭者の大聲を揚げワンク呻りて泣き哀しむ其巧みなること楠公の泣き男も三舎を避る程まで傍觀に眞實な悲しむなる有様かの下和が玉と泣き涙盡さて之を繼ぐに血を以てすると云ひしも斯くやあらんと思ひるれど哭者に於て血をこころか一滴の涙さへ出さばこる葬送終れば善き金儲してけりどて喜び勇さんで歸り去るなり去れど慟者の哭者よりも一層骨の折れる役にや備償の更らふ高きを常とし此役も用ひらるゝ者の悲哀已極りて精神半亂したる態にて歩行も

足踏跟ひょうろくとして定まらず凡そ二三十間も行く時之地上よりド
 ヲと臥し轉まびてさも慙あはれよ呻うめき居ると其側かたはらに付添つふ扶助たすけ
 人ありてよふくくに引き起たせむ其手ても倚よりて又もや二三
 十間よろめき歩行き臥し轉まぶと始の如し斯くして死者の
 子女をして一層悲哀かなしみの情を深からしむると支那人の言ふ
 なれども餘りよ造り過ぎたる虚禮きらいゆる他邦人の之を見聞
 して奇あやし怪き々ごと謂いひぬいなし又死者の身寄の埋葬の時墓
 地ちもて紙錢かみのせに其外紙上にいろく寶貨の形を印行せしもの
 を火かも焼やきながら地上より倒たれて哭泣なみするを例たとへすその泣
 方かたも多少の巧拙じょうてつあるをもて彼れかれの孝子かうしなり彼れかれの不孝ふかうな
 りと評ひやうを爲すも至る此の印せしものを焼く所以ゆゑに我邦の
 通俗とくふく六道錢むだうせんを指さし納たくむると同じ迷まひより起たりし事こともて何

物ものもせよ死者の生前愛したるものを紙かみも印して焼けば
 冥府めいぶも至り必らず死者の手に入るものと思ひ居るなり又
 支那人の冥府も現世このよの如く官府くわんぷを始め農商工等もあり
 て立派りっぱなる一つの社會しゃかいあり現世の善惡ぜんあく事業じぎやうの必ず冥府も
 至りて其應報おうほうを受くるものとし又關羽の靈たまを關帝くわんていと稱なへ
 帝の冥府の大審院長たいしんえんとして冥府の判事はんじ即ち閻王えんわうが不正の
 裁判さいばんを爲す時ときの之を復審ふくしんて正しき斷按だんあを下すものとす茲
 よ支那人が信ずる冥府の裁判制度さいばんせいどの樂器がくきを説とかん人死
 すれば城隍じやうかうとて其地の氏神の死者が平常の行狀ぎやうじやうを熟知しゆくちよ
 依りて逐一しゆくいち之を冥府の判事閻羅大王えんらだいわうも具申ぐしんし閻王えんわうの調てう
 査さの上其人一生中の善惡ぜんあく邪正じやていを裁判する事なるが閻王殿えんわうだん
 下かも時々賄賂まわいの多少に因りて不正なる裁判を爲すこと無

きに非す斯る場合より之を關帝より上告すれば其冤罪を雪
き清むる事を得るなり是故に關帝の最も冥府に威權ある
者とし啻に自己の果報を祈るのみならず復死者の爲め
冥途の安樂をも祈るなり

牢獄の部 附罪人及び所刑

牢獄の狭隘汚穢して半の板敷にて半の土間あり此内は在
る數多の囚徒の其上に藁を敷きて坐臥する有様の宛がら
豚小屋の如し敷藁の官より給ふに非ず囚徒の親族朋友
より獄吏に賂して縦かに入るゝを得る事なれば善き親族
朋友なき者の板間又の土間の上は其まゝ坐らねばならず
飲食等も賂ひの多き囚徒より十分は給すれども賂なき者
は辛ふじて日よ一飯を與ふは過ぎず獄の前面には惠風

吹拂万里雲と晴天白日とか徳澤潤万民とか種々難有語
を幾十枚ともなく張り附けてあれども大赦と云ふこと殆
んど無くして加ふるは獄吏に賂ひするの力なければ罪の
輕重を問はず生涯獄を出づる事能はず始めて獄に入る者
の何等の犯罪亦ても棍棒又の竹杖をもて打ち懲すの例な
るが之も獄吏に賂ひすれば打つこと極めて輕し否ざるも
の皮破れ肉糜れ生命を失はざるを幸ひとす罪囚を究問
する所の獄中の一方は設けたる土間にして囚人の跪く處
の概ね土堀をて卑くなり居るなり若し聊かよても獄吏の
意に觸るゝの申條あれば棍棒忽ち身に及ぶを免れず又極
めて輕囚の外出して買ものを爲すを得去れども其腰より
鐵の鎖を付けぎの端に凡る三四貫もあらんと思はるゝ石

を繋ぎ之を引きながら往來する態の如何も奇妙なり
 又多數の罪人を連れ行く時繩の代りも彼の辨髮の末端五
 六筋づゝ一緒に結び合せ置くをもて一人二人群を脱して
 逃ぐることも能はず支那人に在りては至極の便法なり或時
 上海に於て警吏三個の罪人を船にて護送の頭髪を右ぎ
 の如くに結び置たるが船の未だ全く岸に着ざるも一個の
 罪人早まりて岸に飛び移らんとせしと誤て足を踏外し川
 中へザンブと陥り他の二人も其重量を引かれて倒さまよ
 水中に落ち三人とも一溺死したるは氣の毒と言ふも骨
 なり此の是れ便法中の一害とも申すべきか
 支那の酷刑も屍を万段にするとか尸解にするとか云ふに
 決して昔譚には非ず十餘年前四川省に賊徒起りて其巨魁

の囚となりし時杯は之を裸体と爲て荒繩もてグル
 と緊く巻き締め其繩の間より高まり出てたる肉を肉又よ
 て抉り取り一又ごとに馬賊の肉なりと叫び漸く其肉を抉
 り終りし後に手足をひとつづつ斬り而して頭を断てり又
 先年天津暴動の時も佛蘭西の女教師を裸体となして陰部
 より棒を突き入れ咽喉の處まで通し之を立てて街道を持
 ち廻りし事あり去れば通常の罪人にも棒にて撃ち殺
 す所謂極死の刑ある如きは怪むも足らず總べて死刑の公
 街人民の輻湊どころに於て行ふが故に當日の近傍の商家
 の皆戸を閉ぢて業を休み外出するもの無し試みに思へ我
 が東京日本橋邊にて罪人を引來り鮪を斬る如くも断頭の
 刑を行ひしならむ如何も魚棚の連中といへども閉口する

事ならん殘階を好む支那人が戸を閉るも辞ありと云ふべし
 千金の子は刑も死せずと云ふ支那人の諺の刑法の腐敗たることを知るも足らん清律は備へらざるおへあらねど官吏が廉直ならざれば一片の反古紙の如し如何なる重罪も賄賂多ければ無罪となり或の輕減られ瑣小の犯罪も賄賂なければ時として死罪に陥ことあり
 官吏の部
 官吏は必らず學者より登用する制度にして總べて學生の郡より縣に擧げ縣より府に擧げ府より大學も擧ぐるの順序なり去るからよ滿州鞑靼より武官に出身したる人の中よの目よ一丁字をも知らぬ馬を馳て人を殺すの外藝なき者

も多けれど右の制度も合すが爲めに文華殿の大學士とか翰林學士とかの名稱を有するなり
 貢院とて各地の學生が出で、試験を受くる場所の甚だ大なるものにて之を幾區も分畫り一區ごとよ門あり入徳門、進徳門、登瀛門、杯といろく、の名稱を附けたりこの門は間よ數千箇の辻雪隠の如きものを建連ね各室の奥行六尺間口三尺ばかりあり是の各地の學生が試験の期限中寄留し名譽を萬代竹帛に垂るゝの名文を考へ出す所とす試験中の宛がら獄中に在る如く毫も内外の音信を通ぜず飲食の各門も於て之を爲し其外の學生相互ひよ面會するを許されず筆硯紙墨を給する人のみ時として來るのみ其試験法の誠に公平無私なりと言ふなれども茲に不思議なるは

試檢前に既に試檢の問題を知るの學生あり之を知る事ハ
 左まで六才敷ことに非ず只貧生の非常の難事たるべし孔
 孟の再來もても韓愈の復生もても錢が無ければ迎ても及
 第は覺束なしと云ふ
 扱まゝ一度及第して狀元となり好き位置も就かんとする
 進士も又予る金力の多少も因りて幸不幸の差異を生ずる
 事もて縦ひ同格の縣令となりても非常に収入の多きあり
 又少なきあり全体支那の官吏の俸給甚だ少なくして縣令
 の政府より受くる所の一年數十兩には出でず去れども別
 り役得と云ふ者ありて繁榮なる土地ならば數千兩の収入
 を得べし故も進士にして富裕の地も令たらんと欲する者
 の北京の富商と豫約を取り結び數千金を借り入れ百方手

を盡して要路に取り入り好き地方の官吏となれば赴任た
 る上苛税を取り立て賄賂を収めて負債を償ふこと一般の
 習慣なり曾て或る進士が嶺南の海州と云ふ極貧地の令と
 なりし時一友が祝賀も來りて君は好き地を得たりと言
 ふ主人問ふて曰く賄賂多きか曰く否訴訟少なきか曰く否
 主人憐然として言ふ然らば何故も好き地と宣ふ乎客曰く
 海棠に香ありと世人遂に之を一笑話となし惡地を得たる
 者を海棠香と名づくる事となりぬ鹽鐵茶杯の品物の或
 り地方官もて賣り捌き或り非常の賄賂をなしたるものに
 特許を與へて賣捌かしむるが故も繁華もて商賈多き地の
 官吏たる者の實も夥しき収納あり彼の兩江總督の如きハ
 一度管内を巡回する時の少きとも二百萬兩許りの所得

ありと言へり元來支那の官吏中より大官よりだんくど
 次序を逐ふて其下を搾り取るの習慣にて官吏の稍次ぎな
 る者の上官に奉ずること厚からざれば禍ひ忽ち其身に及
 ぶものから更其下司より搾り取りたる所をもて上官よ
 捧げ下司の又其搾り取られし損失を償ふが爲めに人民よ
 り収斂す唯其の極端に在りて損失を補ふの手術なく只管
 に困窮するもの人民なり已むを得ざれば外國へ出稼ぎ
 又往くか否らずんば山林に入りて劫盜を爲すの外また困
 窮を免るゝの道なし慙れむべし

官吏中より用ふる文章の一種の及第試験の文章にして日本
 の漢學者が綴る様なる漢文をあらざ言語を官語とて滿州
 語と支那語の混合したるもの専ら官吏中に行なはる人民

中よりも官語を解するもの多けれども全國一般に行はるゝ
 ならず或は官語を聞き取り得るも自から話する能はざ
 る者多し故に官民は言語を通ぜざる事あるのみならず民
 と民とも亦言語不通にて困却する事珍らしからず

青樓及ひ料理店 附茶店 旅亭 浴屋

彼の國の風習として門戸までも窓欄までも無暗に青紅綠
 黄等に塗り込むことは皆人の知る所なるが妓院及び料理
 店の別けて目立ちて一見して之を知るべし娼妓の客の枕
 席を待するの外竹を吹き糸を弾くの藝を兼ねるを常とす
 開港場よての外國人の爲め別遊郭を設け其体裁大よ
 一般の支那の妓院より異なり内國人の遊び通ふ處は支那
 人の紹介をあらざれば行くことを得ず今其策略を説かん

に飲食の場所と歌舞管弦の場所とは別々として客はまづ
 室は一方と於て飲食し酒半酣に至りて音楽を聞かんと欲
 すれば他の一方に至り其一間と設けたる椅子に倚りて茶
 を啜り煙草を喫しながら歌舞を見管弦を聞く己にして又
 飲食を欲すれば故坐を還りて之を爲す此くの如く或は酒
 食の坐に就き或は管弦の坐に就く幾回と云ふ限りもなけ
 れば酒を嗜み兼て管弦を好む客の随分忙がわらき事なり
 衆多の遊客とともく遊ぶ時々の銘々愛妓を作ひて一
 双の飲食するあり又一双の歌舞するあり談話するあり拳
 を闘えすあり其雑沓言はん方なし臥床は別又一小室と設
 けて椅子小卓兩便器等を備ひ其模様は如何おも行届きた
 る様なれども此室は終日堅く鎖て空氣を流通せず且婦人

は入浴こと甚だ稀にして香油と紅粉とを多く用ふるも
 のから一種の異香ぶんとくとして堪えがたき程なり殊よ
 妓流の妙年の紅粉を兩の頬へ夥しく塗ること故宛ながら
 畫本の金時か劇場の岩永の顔の如し本邦の妓樓又は樓婆
 ありて娼妓と對しては權力を振り廻す事となるが支那
 の樓婆は娼妓と對する權力の外も客と對しても甚だ勢ひ
 ある者にて押客といへども此樓婆に略ひせざれば登樓す
 ること能はず是を支那青樓の概略とす扱また外國人の爲
 めと設けたる妓樓の体裁等ハ全く右と説く處と異として
 遊ばんと欲する者は娼妓の居る處に至りて意に適ひし女
 と口約を結び幾回か幾金と定むる事とて一宵か幾金と定
 むること稀れなり尤も此口約を爲すは密々私語くに

はあらま衆人の前よて公然盟約を取り極めるを例とす料理店の我邦の如く酒食の外に歌童妓を呼び上ることを得去れども其体裁習慣は甚だ異なる所あるより邦人杯よして彼の風俗に暗きものと彌次喜太一般の失策を爲す事多し或る日本人は曾て此料理屋よ登りしが此人元半可通の男なりしかば支那の料理店も我邦の茶屋も何ぞ其れ異同あらんやと云ふの權幕にてパチと手を拍ち樓僕を呼びて歌妓を招くべしと命じけり暫らくありて一人の女室内よ進み來り鄭重よ禮拜をなして一本の扇子を客の坐右よ出せしを見るよ扇面よの青蓮紅梅等は文字ありければ半可通先生はッど大呑込にて是ぞ故國の茶屋杯よて出す見番帳と同じものよて青蓮紅梅等は藝妓の名ならん

去れば此中何れかを名指し呉れよとの事なるべしとて未だ見もせぬ藝者なれども名稱の美しそうなるを指ざし此れだくと言ひけるに其女は俄かに起て裂竹の如き大音を發して唱歌いだしたれば半可通先生の接お相違し愕然として暫しの物も得言ざりしと云ふ支那にては音樂を聞かんと欲する時少なくとも數人の藝妓を呼ぶばならぬ事よて然る時の専ら歌を謠ふ妓もあり蛇皮線を弾く妓もあり手板とて火箸もて粗板を撃くが如き黒を持つ妓もあり其外いろくなる役目あり決して我邦の如く一人よて謠ひ弾くと云ふ事なし然るに彼の客の唯歌妓を呼んたるが故よ一の樂器をも携ふよとなく扇面よ歌曲の名を記したるを捧て何の曲を謠ひま志ようかと問ひたるなりしよ

客の見番帳なりと思ひ違ひ一の曲名を指したる故起て其歌をうたむしにぞありける又城中に營妓と云ふ者あり兵營中よ往來して兵士の悵鬱を慰む又北京等にて官吏が藝妓と呼ぶことの出來ざる處には歌童翫童あり妓流の代理を勤ると聞けり

廣東省城の側を流る、珠江一名は廣東河と稱する江上よ筏を浮べ其上よ住居を造り立たる一種水上住居の人民あり其中に娼家料理屋も多くして盛夏納涼の時よ最と繁盛なり此等の住居の皆一箇々々の筏の上に造りしが故よ繁綱を解けば別々の家となれども繁合すれば大なる市街となりて往來殊の外便利なり娼家の寢房の如きは皆一の小船に設け平常は家に接して在れども録酒醉きわまり

紅灯影くらげ狸客双を寢房み進み入れハ其綱を長くも漂として中流み出で水風枕を拂ふて江月鏡を照らし絶えて三伏の熱を知らざるのみならず更に情味の最と濃なるあり夏の夜のまだ露ながら明ぬとて曉鴉を怨むる比及べば娼婦の織き手に棹をあやつりて遊客を陸地よ送りかへす奇妙なる習のしと申すべし

茶店の何處の市街もあらざるの無し中には數百人を容ても差支なき大茶店あり此等の家にては唯茶を飲み菓子を食べ許りみて婦女子の居ることなく藝妓の來ることなく又酒食をなさず繁ぬ商法杯の相談場として用ひる者にて常よ三人五人つゝ集り時としての數百人會合して何事か話し居れど終日茶ばかり飲み居るの不思議なり併し

湯腹も一時と言へば茶腹の相談で大利を得んどの節儉主義ならんか。旅店の旅客は房室のみを貸すことを常とす或は飲食を供ふるものあれども夜具杯の自辨なり故に支那の内地を旅行するものは是非とも車又ハ驢馬を備へねばならず斯くて旅店に着すれば先づ主人に就て一間を借り受く此時主人の鍵を授くるを通例とし客は必らず出入とも其間の戸を鎖す事とす一体支那にてハ盜賊の多きこと非常にして宿屋の僕婢も決して油断ならず本邦人の日本にて宿屋の安全なるに慣るゝより支那の旅店でも借間の戸を明け放し置き賊難に逢ふこと甚ばなり余が友人彼の地の旅店にありて留守中ハ傘又ハ手巾の類を數回失ひたるが

其度ごと外より賊の入りたる様子のお知らせりければ定めて僕婢の業ならんと主人に追りて吟味せよと言ひたるは主人の反て逆振に論詰め斯る事あればこそ鍵を渡し置きたれ自分の物を不注意にして他人に取らるゝの自業自得なりと大に嘲けり笑ひしと聞しが獨り僕婢の盗みするのみならず主人とても客が不注意なれば盗みを志まじきにもあらず支那へ往く人の御用心。浴店の構造ハ本邦と異り湯場を雪隠ほどの大さの幾小區にも分ち其中に一つの大桶を置きて温湯を入れ其上に板を渡たし小さき手洗桶を載たり此手洗桶にて大桶の湯を汲み取りて身体を洗ひ大桶の中に入りて暖まる茲も奇なるハ男女とも浴場は於て顔を洗ふと言ふことなし顔ハ朝

を洗ふゆゑに三重の手敷を要せずとの意か小區の其戸を
 密閉したるま由り暗くして咫尺を辨へがたむ身体を洗ふ
 よも只手探りをもてするのみ
 遊戯の部
 支那人の耳の一種特別の構造と見せ喧噪しくて頭痛をも
 起す程の音聲を聞て至極の愉快となす去るから顯官が
 外出の時などにも銅鑼大鼓の類をトシカシ、ガラ／＼と
 鳴らして先だち歩行事なり況して劇場杯のその噪しきこ
 と言語も絶し唯一幕を見れば大抵の日本人の頭痛を起し
 眩迷をもよぶすべし今茲も手短な狂言の有様を言ひん
 樂屋にて色々の樂器もて耳を貫ぬぐ程は嘸し立つると兩
 花道より多くの兵卒手よく、槍刀を振り廻りして大合戦

の模様を爲して舞臺よびて一方は遂に敗北し勝ちたる兵
 の勇も勇んで退却かは行く此時又樂屋まで嘸し立つると
 兵亂を避くる老少男女と見えサモ慄れなる態して逃れ來
 るを惡漢が出で來りて其中の婦人を執らへ之を縛りて人
 買ひよ賣渡さんどす折しも一方の花道より有徳の老人い
 て來り此有様を見て何事なりやと問ひ糺し如何も慄然
 お思ふと云ふ容体にて惡漢を諭し金銭を與へ婦人を伴な
 ぶて家よりへる是れにて一幕すみ又嘸し立つると今度の
 婚禮の場まで老翁が吉日を選びて彼の婦人は長き婚を迎
 ん處をなし大宴會を設けて其席まで種々様々の藝ありて
 目出度婚姻の儀式を終る此にて又幕となり最後より老翁
 病氣となりて養生手を盡せども終に死去し親族の愁傷大

方ならず別て彼の助けられたる婦人の昔の事を練かへ
 して泣き悲しむ此夜深更で閻王城隍等顯れ出で下官を呼
 びだして何故此老翁の魂魄を冥府よ呼び取りしやと問
 ふよ下官等の帳簿を持出し此者の何年何月よ生れて最早
 命數盡きたりと答ふ此時城隍の老翁が兵亂の時斯々の事
 みて人を救ひ其上良縁を求めて其人の世繼ぎある様にし
 たりとて頻りよ其陰徳を稱め閻王と相談のうへ今より更
 よ幾年の生命を與ふべしと帳簿よ記し入れ下官よ命じて
 魂魄を取り來り口中お返へし入れしめ忽然と消は失せる
 や否なや死人のアツと叫んで蘇生す家内の者いで來り之
 を見て大よ悦び俄かに盛宴を張りいろくの音楽を爲し
 て其日の千秋樂となる勸善の趣工よ相違なじと雖と見て

恍惚よふの妙境もなく又人情よ感んじて涙を流すよふな
 愁嘆場もなし
 音樂の器は種々あれども鼓弓ハ恒よ音樂よ離れぬものと
 す其のキトと云ふ聲音の能く支那人の耳よ適ふが故にや
 あらん男女どもに多少は音樂を知らざるもの無し音樂の
 外支那人の羽子を蹴りて遊ぶ事を好む羽子は本邦よ於て
 一月の始め女兒が翫ぶものより少しく大きく且つ重し之
 を蹴るよハ五人十人大輪よ居並び足を揚げて蹴り受授を
 爲すよ羽子の地に落ることハ最稀れなり其巧妙なる感心
 すべし此熟練より彼れハ鬪争の時足をあげて相手の面部
 を蹴り合ふ宛から鷄の蹴合の如し遊戯の熟練も時よより
 て實用に立つ事あり馬鹿ハならず

市場の部
 市場の体裁を記す前、通用貨幣の事を説くべし。支那にては、貨幣の形、よて通用する物の、永樂、康熙等の、小銅貨のみならず、金銀珠玉等、よて通用するもの、有れども、定まりし形なし。尤も、蹄金と言つて、馬の蹄の様なる、大塊金あり。一箇四五百丁の、價値をもてども、是れ、政府にて鑄造のもの、非ず。又、碎銀と稱して、小豆粒の如き、銀を紙に包みて通用する者あり。其封目に、豪商の極印を捺せり。所謂封銀なり。銅貨を以て、市場に買物に往くもの、長き糸に、錢孔を貫ぬき、十圓二十圓の、多きを要すれば、之を首の周圍より、兩肩腰の邊に至るまで、グルグル巻き付けたる態、如何も奇妙なるが、之を片端より、抜き取りて、買物を爲す事なり。又市場へ

往くには、必らず、量衡を携へる風あり。彼の碎銀、何処の、と云ふ定めなき、故物品を、賣買する者、互ひ、所持の量衡も、て、之を量り受け渡し、爲すがためなり。譬ば、玆に一兩の物品を買はんとする者、おらん、に先づ、其價を約束し、買人の腰より、量衡を抜き、懷中より、碎銀を出して、一兩、又は、一方を量り、之を渡せば、買人も、また、量衡を取り、たしまづ、碎銀は、價物にて、ななきや、と、檢ぬ。然る後、量りて、相違なければ、賣買を終るなり。斯く、煩勞、手数の掛るが故に、無益の時間を費やすこと、多し。去りて、銅貨を持行けば、一文、數ふるに、手間取り、何れ、よして、も、誠とに、支那人固有の、氣の長き話なり。兩、云ふ、元量目の、各よして、貨幣の、稱、非ず。支那人の、斯く、目方を、求て、通用物を、量るの、風なる、よ、日本の、銀貨、又

の墨斯科の弗よても之を量らざれば受渡せず或る日本人
 が香港の支那見世に於て半圓許りの買ものを爲し其價ひ
 として一圓銀貨を出せしよ折節店主の持合せの釣銭やあ
 らざりけん一つの斧を取り來りて彼の銀貨を兩斷り半片
 づと量り少と重き分を返へし大負けをしたりと言ひし事
 あり聊かの買物にても手敷のかゝること此くの如し且支
 那商の一艘も懸直を言ふこと甚だしく恰も我邦夜見世の
 植木を賣る如し彼國の一商人が骨董店よて一の品物を買
 ふ所を見たるも言ひ直り百六拾圓なりしを買手の五圓よ
 り價を附け始め凡そ三時間も費やして七拾圓も買求たる
 双方とも氣の長き事と窃も仰天せり尤も支那人とても
 箇程も氣長き者のみにあらず中に直を附けて負けざ

る時の已れが相當なりと思ふ丈けの價金を投げ置き品物
 を取りてメンくとして出て行く者あり我邦ならば押買とか
 泥棒とか言ひれて巡公の厄介もなるべき舉動なれども
 彼國にては元が法外の懸直ゆゑも主人も左まで立服する
 様子もあく負けぬくと言ひながら客が持行を追ふこと
 かし法外の懸直を言ふ主人ある故も押買ひする客あるか
 押買ひの客ある故に法外の懸直を言ふ主人あるか開は何
 れもや分らぬども主も客も丁度釣合ふたる舉動と言ひま
 く而已
 市場の景况は本邦の朝市の如くなれども最不規則にして
 青物市魚市といふ様もそれく類を分ちて市をなすも非
 す陶器を賣る者は肉類を鬻ぐ者と隣り野菜の古道具と交

はり香粧の米麥と列なる所の他百貨入が交じり喧
騒き事言のん方なし此市場にて太古の貿易の如く品物
をもて品物に易ふる事頗る行われ米をもて道具易へ絹
布をもて肉類易ふる等の交易を欲する者の西走東奔て
忙がゆし斯く物品交易の相手を見付くる爲め奔走する
は甚だ不便の事矣れども貨幣の制度宜しからざる支那に
てり據るなき次第と言ふべし茲も最も不便利なる米穀
の如き枘をもて量る物を買へんとする者は是非とも自か
ら枘を携え砂糖肉類の如き衡よて懸くる物を求めんとす
る者は是非とも自から衡を持つを要す此等の品物を賣る
者固より量衡を所持すれども詐偽不正の支那人中の常事
なれば賣手の量衡の誰れも信用するもの無し故又自から

之を携えざるを得す彼の國社會の腐敗たる事制度の不行
届の事之よても十分又知らるゝなか金銀の大塊及び珠
玉の大なる商賈の取引又の重なる官員への贈物として用
ひるのみみて日常市場にて見ること稀れなり
雜部
荷めよ並都會と名の付く處より孔子の廟あらざる無く其
側より必らず學校あり讀書の時誦みて大聲を發する風な
れり喧噪こと甚だし書翰の千字文四書の類なり習字の模
寫法よて上級生徒の先生の手本を寫し次級の生徒の上級
生徒の淨書と寫すと云ふ如く順送る模寫を爲さしむ算術
は殊に意を用ひて教ふる習慣なり此等の學校にて生徒
が一通り讀書に熟すれば直ち日常往復の文章杯教ふ

るをもて見れば我邦昔時の寺小屋くらひの者と思はる理
 化學其他實用の新書を教ふるの西洋宣教師が設けたる學
 校のみ支那人が孔夫子を尊敬すること甚だしきハ勿論な
 るが就てハ茲ハ一つの奇談あり或る日本人香港へ至りし
 に寄留中旅費つきて進退此ハ窮りしより風と一策を案じ
 出だし村學究の支那人の家へ住きて唐紙をいだして揮毫
 を乞へ連りに其筆跡ハ美しきを稱め遂に學究殿を誘ひい
 だして共ハ孔廟へ詣でけるが外門に入る時彼の日本人ハ
 故らに香を脱て跣足となり内門に至れば膝行し廟前へ於
 てハ三拜九拜して額より血を流せしかば辨髮先生ハ之を
 見て大に驚き其故を問ひたるハ答て云ふ様我が日本よて
 ハ孔夫子を尊ぶこと一方ならず是をもて余ハ外門へ入る

時士ハ汚れたる香をぬぎ廟前よてハ膝行頓首の禮を行ひ
 たる儀にて額より血の出でしハ敬の極知らす識らす此ハ
 至り者なりと辨髮先生頻りハ其篤志を感歎して曰ます彼
 の日本人を家へ伴ひ歸り厚く酒飯を供へて後諸人に計り
 て釀金をなして之を贈り與へければ日本人ハ英略圖に當
 り數十圓を得し事なれば之にて船賃を拂ひ目出度長崎へ
 歸港せしと云ふ人の物をむさ取り取る程貪吝の支那人も欺
 むくハ其方を以てすれば又箇様に一杯食ハさる、ことあ
 り一笑すべきなり
 支那ハ元佛敎の盛んハ行なハれたる國なれば壯大なる寺
 院堂宇今も猶あり去れど現時ハ佛力衰微して昔の寺院堂
 宇が其まハ存立するのみよて破る、ハ任せ腐る、ハ任

せ修復手入れをすむと云ふ事なれ俗談よく説く山寺の
 荒果たるも一般に妖怪の出でざるが善き仕合なり之も
 住居する僧侶がまよひおぼれを學問もなく積徳もなく頭
 ころ圓けれ宛がら乞食も均しき者もて人來れば布施を乞
 び其上本堂なり奥廡あり羅漢堂なり戸を開がしめて一見
 を望む毎に若干の見料を請求す或る一人の有名なる寺
 院に到りて一見を請ひ定式の見料を出して見廻る中よ
 古き寺ゆゑ屋瓦其外古雅にして珍重すべき佛体等のあり
 ければ案内の寺僧に向ふてそれく得たしと言へば頭
 をふりて袖なげまを答へ容易ゆるすべき氣色なし斯くて
 日本人の懐中より五十錢銀貨一枚を出は之を與ふべけれ
 ば是非得させよと言へば彼僧悦んで首肯す且言ふ貧道の

背向となりて見ざる故其間何物もても取るべしとて凡
 そ小半時も庭面を見て動かねば日本人の勝手次第も物を
 得て出て去りしと云ふ斯る情況なれば屋瓦も片端より剥
 り去られて雨を漏し佛休も年月に減んじて空壇を生ずれ
 ども僧俗とも平氣として意とする者ありあらず
 除夜及び元旦中元を始めとして総べて祭日なり必ず爆竹
 一名を百發炮と言へるものを用ふ所の紙巻煙草の如く製
 したる夥多の小袋に硝薬を入れて一連又繋ぎしものよて
 其一端に火を付れば段々に火移りパチパチと喧しき音
 を發す支那人の不淨掃ひ惡魔除けの功あるものと思惟り
 中元すなわち盂蘭盆の盂蘭盆の盂蘭盆と号して大なる小屋を造り
 て其四面に勿論屋上内部までも焼火を懸連ね又飾人形を

据えたり男女老少之を遊観して非常の快樂と爲す去れども此物の甚だ危險して若し火を失する時の死傷を蒙むる者多し曾て香港よて龍山の焼けし事あり二万圓程の費用を入れしものを烏有と歸し且つ數十人の死傷あり其後英官等相議して再び斯る馬鹿氣たる祭典を禁止したりと聞けり
 賭博の法律上よての甚だ之を禁ずれども實際よ於て公然行はれ市街の中處々よ博場あらざるの無し且つ賭場と鴉片煙店との相離ぬものよや或の隣り合ひ或の一軒の中博室と煙室とを備ふるものあり茶店よ往きて長話をなし博場に入りて時間を費やし鴉片煙室に立寄りて熟睡すれば人間一生有用の事業を爲すの時の幾多もなし是れ貧民

の支那よ多き所以なるか又鴉片煙を嗜む支那人良き商法ありて日本よ來らんと欲すれども本邦よの鴉片の嚴禁なるより寶の山を望ながら得來ること能ぬ者あり然して見れば利慾の心も鴉片の嗜好よの勝れぬものにや此賭博と鴉片との收税の頗ぶる巨額なるが故よ支那政府の其の有害なるを知れども之を禁むること能はずと云ふ
 支那の人口の四億餘あり杯と言ふといへども是の西洋人が土地の面積よ割り當て、算出したるもの故確實とするに足らず支那の政府と雖ども己れが國中の人口の幾多なるか地面の廣狹は何程なるか恐らく知らざるならん試みに支那人よ向ふて其人口を問へば中華の大國なり普天の下王土に非ざるのなし率土の濱王臣に非ざるのなし人類

鳥獸万物に至るまで皆中華皇帝の所有なり何ぞ數限あらん杯と大言を吐けども實の戸籍法の不完全よて知りたき進辭なり地方官の入口上申の如き成るべく前より多數に書きいだし臣が赴任以來陛下の高徳よて五穀豐饒にして人口繁殖したり杯と法螺を並べて賞與を得んとする故是も亦決して當はならず唯一口よ支那を評せむ大國衆民よして上下已に腐敗たりと言はんのみ

支那風俗一斑 終尾

明治十八年三月十六日御届
 明治十八年四月 出版

編輯兼出版人

島根縣平民

三島鹿之助

東京府芝區新錢座
 町一番地

賣捌并發兌

弘道書院
 雜書出版部

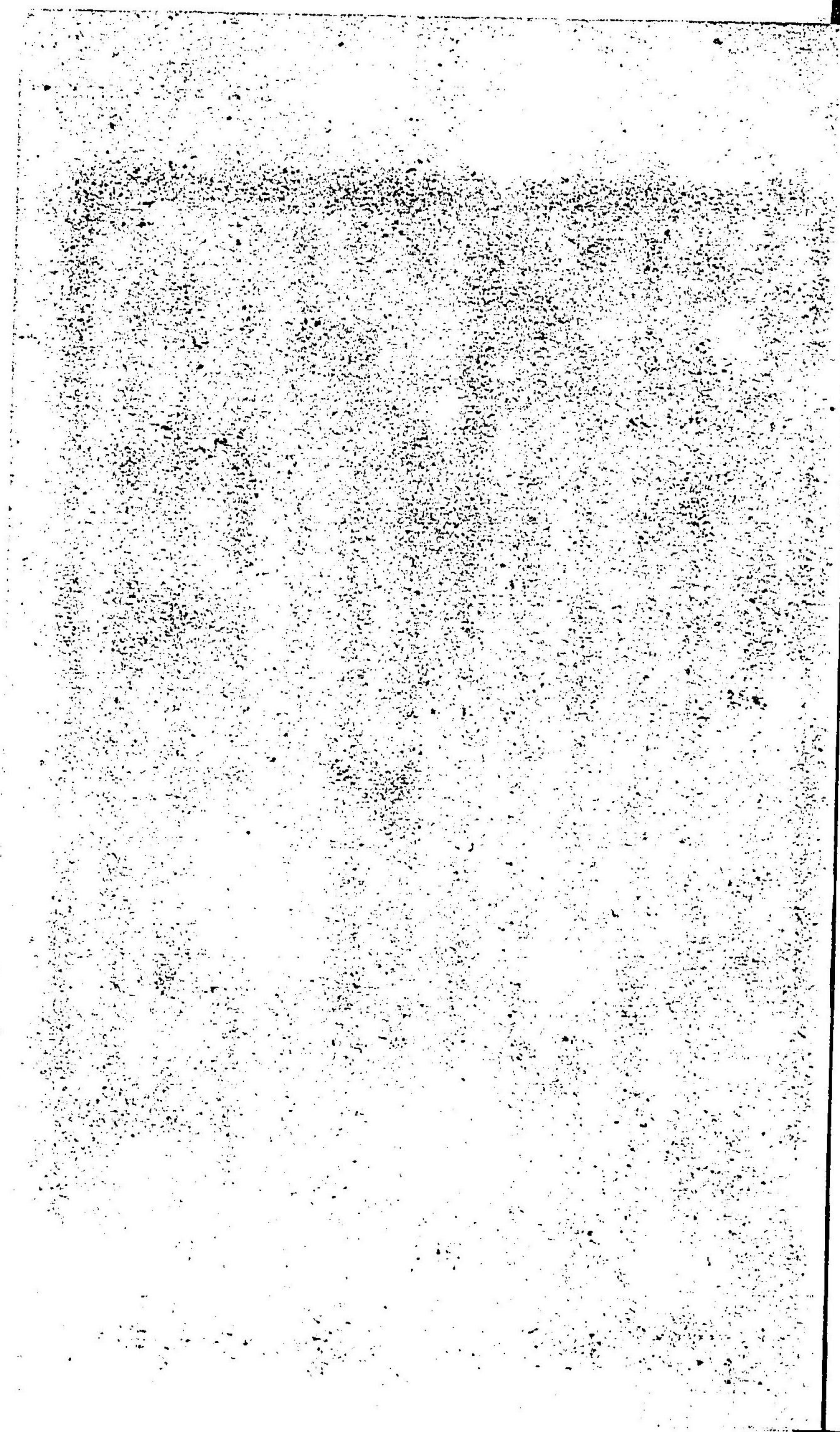
東京府京橋區
 弓町八番地

弘道書院
 賣捌代理店

北尾禹三郎

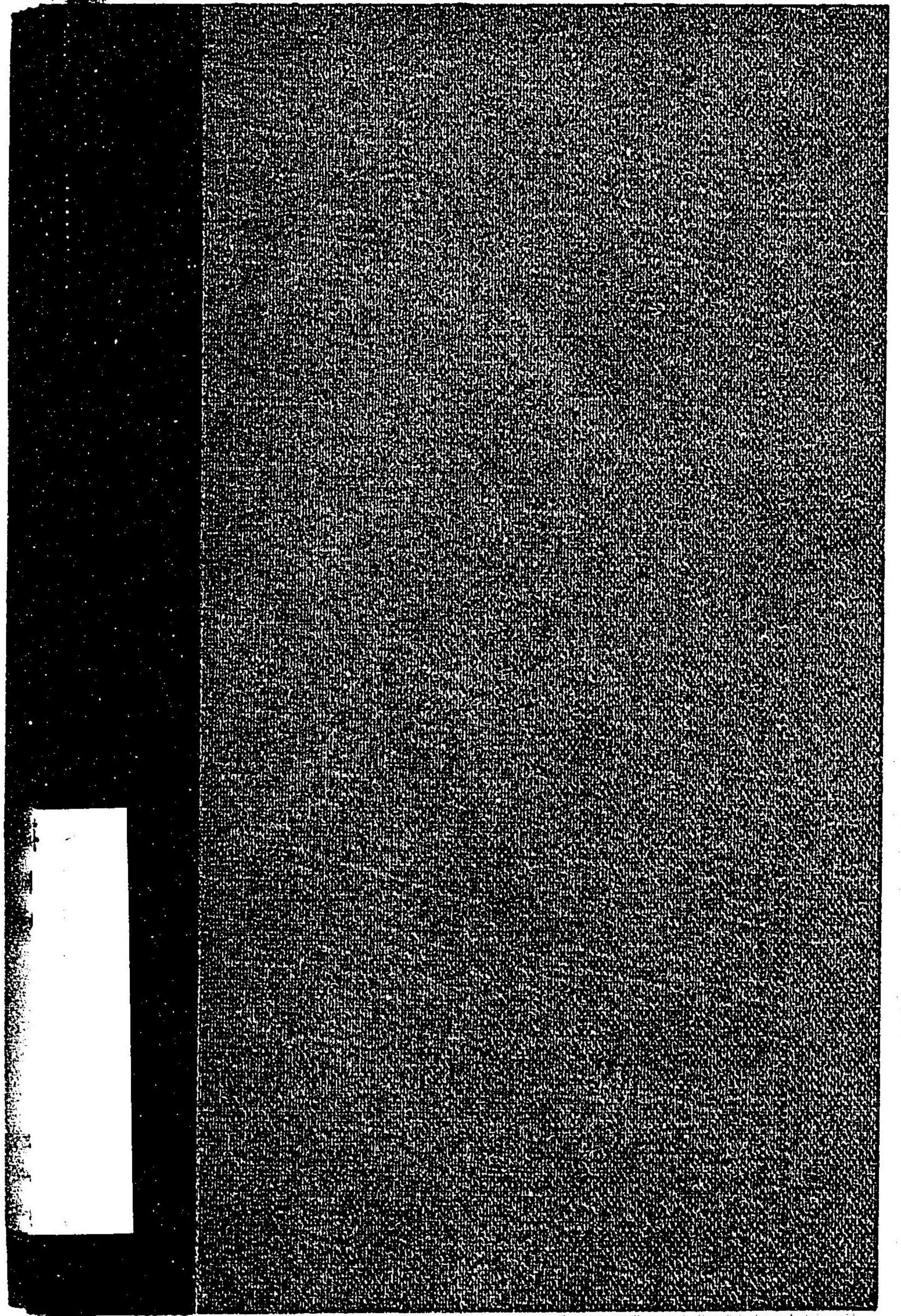
大坂東區心齋橋
 通安土町四丁目

定價銀貳拾錢



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

ex 431



027329-000-7

特29-649

支那風俗一斑

三島 鹿之助/編

M18

ADJ-0082

